

バトンゾーン

第32回



全障研岐阜支部
土岐邦彦さん



岐阜大会準備委員会のメンバーと

若者たちのエネルギーに背中を押されて（下）

発達保障の地域づくり

大東文化大学では3年間助手を務めたのち講師となり、ゼミ活動の場として学生たちと一緒に活動できるフィールドがどこかにならかと考えていた時に参加した東京都の教研集会で八丈島の川瀬喜重子さん（小学校教員）と出会い、夏と春のゼミ活動の場を提供していただけました。

その頃の八丈島には発達保障のためのシステムが充分に整備されておらず、利用できるインフラも限られていました。この島で障害をもつて生きることがいかに困難であるかということを痛感されていた川瀬さんは、自分の学級の子どもたちやその家族のことを考えるだけではなく、保育士さんの相談にのつた島で生まれ育つ障害児にも積極的に参加されていました。この島で生まれ育つ障害のある子どもたちの発達を保障

するために、地理的な条件による困難さはあるものの（いや、あるからこそ）、人と人との要求でつながること、それが発達保障のための地域づくりの貴重な一步であることを川瀬さんは私と学生たちに身をもつて教えてくれました。

その後、一九九七年に岐阜大学に異動しました。ゼミのフィールドは海から山へと移り、飛騨高山地区で長年活動を継続している「障害者問題を考える会」に協力いたしました。飛騨高山の親さんはとにかくよくまとまっています（岐阜では親御さんのことを敬意をもつて「親さん」と呼びます）。特にお父ちゃんたちのパワーが大きく、お父ちゃんたちが日常的な会の活動場面でも、作業所づくりの運動においても先頭に立つて頑張っています。八丈島と同じように八丈島とともにかくよくまとまっています。飛騨高山でも見せてもらいました。

岐阜で全障研大会を

岐阜に異動してすぐに全障研岐阜支部にかかり始めました。当時の岐阜支部は肢体障害のある森和子支部長を中心に行き、作業所づくりの運動や「発達保障講座」などの学習活動を旺盛に展開していました。数年後、森さんの体調を考慮し、支部長を引き継ぐことになりました。

岐阜支部は二〇一五年に全国

大会を開催しました。その3年前の秋、当時全国委員長だった荒川智さんから「大会を受けてくれないか」という打診がありました。支部事務局で話を聞いてみると、「いつも参加するだけだつたけど、やるしかないね」という雰囲気に。準備委員会の立ち上げを呼びかけば、教員も福祉関係者も親たちも、かなりの人が集まってくれ、これならやつていけると思いました。

岐阜全体で催す大会にするために、準備の段階では飛騨、東濃、西濃など県内各地につながりをつくっていきました。

岐阜と言えば知的障害や自閉性障害のある若者たちの演劇集団「劇団・ドキドキわくわく」の活動が10年目を迎えていました。若者たちのパワーを全国の人々に見せたくて、文化行事として演劇をぜ

ひやつてほしいとお願いしました。また、全体会の司会も各地域から一人ずつ、4人の障害のある若者たちが引き受けました。若者たちが前面に出て盛り上げてくれたことは岐阜大会の誇りです。岐阜で大会ができる最高に良かったし、本当に楽しかったです。

そしてバトンは…持つてない

考へてみれば、私自身がいろんな運動の先頭に立っていたわけではありません。岐阜地区で二つ目となるきょうされん加盟の作業所「ポップコーン」設立の運動に加わったのも、お母さんたちの熱い思いに突き動かされてのことでした。劇団の活動への支援も、障害のある若者たちに「性と生」の学習が極めて重要であるとの認識から演劇的手法を用いて試行錯誤されていました。渡辺武子さん（中学校教員）の姿に触発されたからです。自分がバトンを持って走ったとい

う自覚なんてない。ただ近くで応援していたにすぎません。

岐阜支部のメンバーの活動は、大会が終わって中だるみするどころかむしろパワーアップしています。大会時にかかわった若者たちが新たな仲間を誘い、コロナ禍のなかでも多様な学びの機会を企画し継続しています。みんな自分のバトンを持つてスタートを切つていました。

要求があるところに人と人の関係が生まれ、そこで協働的な活動が展開されることで人ととの関係がさらに広がり、そして深まり、要求の実現に近づいていく。こんなことを、自分から求めて、あるいは求められて参加した諸活動を通して学んできました。中学時代からスポーツという活動ではみんなの足を引っ張るばかりでからきしダメでしたが、自分をほめてもいいかなと思っています。（おわり）



岐阜大会全体会で司会を務めた若者4人